

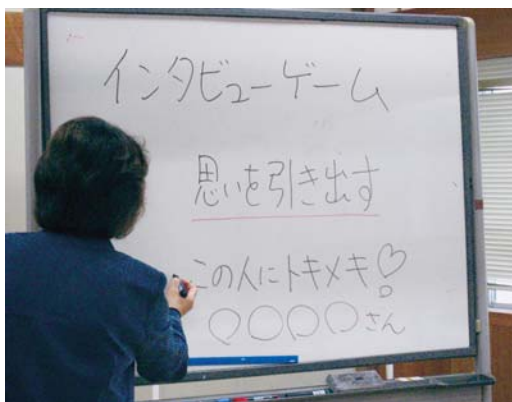
新潟県柏崎市北条地区の取り組み —学校と地域が連携した防災訓練— —北条コミュニティの取り組み—



学校—地域連携型防災訓練
授業中に震度 6 強の地震が発生したと想定



校庭に集合して安否確認



市民目線で北条の「いま」を伝える
—北条市民レポーター養成講座—



近くの柏崎市立北条中学校まで歩いて避難



高齢者の食生活を地域住民が支える
—手づくり総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖」



平時・災害時において北条地区内外の情報共有と
情報発信を担う—北条ネット—

新潟中越地震（2004 年）、新潟中越沖地震（2007 年）という 2 つの大きな震災を体験した柏崎北条地区。2009 年 9 月には柏崎市立北条合同小学校で、地域と学校が連携した初めての防災訓練が行われました。平日の就学中に地震が発生したと想定し、児童の避難行動・安否確認、地域との情報連携、児童の保護者・地域への引き渡しなどを訓練。児童、PTA 関係者、北条地区コミュニティ振興協議会、町内会、柏崎市の職員などが参加しました。

さらに北条地区では、平常時からの地域のつながりが災害時に有効に働き、地域の防災力の向上につながると考え、さまざまな取り組みを行っています。

柏崎市北条コミュニティでの 学校と地域の連携による防災訓練

柏崎市のコミュニティ —住民主体の地域運営—

2007年新潟県中越沖地震の中心被災地となった新潟県柏崎市は、人口約9万3000人、世帯数3万4000戸の県下第8番目の都市です。1940年に市制が施行され、その後昭和20年代から40年代にかけて周辺市町村を編入する形で市域を拡大してきました。現在の柏崎市は、2005年5月に市の南部に隣接する高柳町と北部に隣接する西山町を編入し、442.7km²という全国で238番目の面積を有する自治体となりました。これは神奈川県横浜市内にほぼ匹敵する大きさです。

柏崎市には他市と異なる特徴として、旧自治省（現総務省）が推進したコミュニティ政策を契機にコミュニティセンターが建設され、現在32のコミュニティ組織が存在します。このコミュニティ組織が地域住民主体による災害対応活動に重要な役割を果たしました。各コミュニティの外郭部分は市の形成過程で編入された旧集落を単位とした地区となっています。

「コミュニティの運営主体は住民である」という考え方は、1972年に市の東部に位置する中鯖石地区が自治省のコミュニティモデル地区に選定されたことをきっかけに、柏崎市の市制基本方針に位置づけられました。これを明確にするため、「柏崎市市民参加のまちづくり基本条例（2003年3月20日、条例第6号）」を定め、コミュニティを「自主性と責任を自覚した市民で構成される地域社会の多様な集団および組織をいう」と定義しています。32のコミュニティは概ね小・中学校区単位で組織されており、それぞれに自主的な運営を担う例えば名称を「コミュニティ振興協議会」と呼ばれる組織を軸に活動しています。

コミュニティ振興協議会には、協議会長、センター長、および主事があり、各コミュニティ独自のルールで役員が選出され、事業を行っています。中には、協議会長とセンター長が同一人物であるコミュニティも存在します。

協議会長はコミュニティ運営の

全般を主導し、センター長は施設としてのコミュニティセンター（以下コミセン）の管理・運営を担っています。主事にはコミュニティ業務に8時間従事する8時間主事と、5時間従事する5時間主事の2種類あるのが基本ですが、世帯数に応じて片方だけのコミュニティもあります。センター長と2種類の主事には市から手当てが支給されています。コミセンは地域住民主体の地域づくりに取り組む拠点であり、従来の公民館とコミュニティの一体化を図る施設で、集会場、図書室、体育館の3点セットがほぼ整備されています。

柏崎市のコミュニティの特徴として、2003年度から地域住民自身がコミュニティ計画を策定し、それに基いてどのような地域づくりを目指すのかを決定し、具体的な目標を立てて活動している点があります。その実践的活動の場として、コミセンは各コミュニティの重要な中心施設となっています。

また、市では、各コミュニティが策定した計画を実施するための費用として、一コミュニティにつき100万円（平成17年度）を上限とする補助金（補助率の上限9割）を支出しています。この補助金によって、各コミュニティでは地域課題解決事業、人材育成事業、地域固

有資源等整備事業、地域活性化イベント事業などを実施しています。

実際に行われている主な事業として、①地域の安全・安心事業（自主防犯活動、自主防災活動）、②生きがい・子育て支援活動（趣味やスポーツ活動などの生きがい教室、育児支援サークルなど）、③地域活性化イベント（各種地域まつり事業）、④環境美化（川の清掃や植栽の管理など）、⑤人材育成（人材バンク事業、ボランティア事業など）などがあります。

中越沖地震における北条コミュニティ とその後の変化、今回の防災訓練

今回防災訓練を行った北条コミュニティは、柏崎市の東部に位置し、人口約3400人、面積44.78km²でJRの駅が3つもあるほどの広大な地域です。北条地区では、2007年7月16日に起こった中越沖地震において、コミュニティが有効に機能し、災害への対応が迅速に行われました。これは、その3年前（2004年10月23日）に起こった中越地震の教訓を生かして、北条コミュニティが地道な取り組みを行ってきた結果です。

防災科学技術研究所（NIED）は、中越沖地震後に北条地区に入り、平時の地域での取り組みと発災時の取り組みの関係性について、コミュニティを中心に調査を行ってきました。これまで地域防災力の中心的担い手であった町内会や自治会と比べて、コミュニティの存在はどのように働いたのか、また平時のコミュニティ活動が地域にとってどのような意味を持ち、それが発災時にどのように作用したのかということは、災害リスクガバナンスのあり方を考えるうえで、極めて重要です。

私たちは、スノーフェスティバルやコミュニティまつりなど地域のイベントに多くの住民が集まる光景を目の当たりにし、共同体として地域が存在することを実感しました。しかしこのような北条コミュニティでも過疎化が進み、解決すべき地域課題が浮き彫りになってきました。

そこで、北条コミュニティの現



柏崎市の32コミュニティ

況について整理し、その課題のひとつとして「災害対策のさらなる整備」を挙げ、解決方策として「地区災害対策本部の高度化」、「地域内外とのネットワーク」、「初動対応マニュアルの作成」、「学校と地域が連携した防災訓練」を提案しました。

今回は、その中の「学校と地域の連携による防災訓練」を実施しました。北条地区では過疎化が進み、地域内に2つあった小学校（北条北小学校と北条南小学校）が北条合同小学校1つに統合され、徒歩での通学が難しくなった児童もいるため、スクールバスが運行されています。なお、北条北小学校は、2008年度に閉舎され、09年度からは北条南小学校の校舎において両校が合同授業を実施しており、通称は北条合同小学校で統一されています。そこで、学区（通学範囲）が広がった北条合同小学校において、学校と地域が連携することによって、児童が安全に自宅へと帰宅できるように防災訓練を行いました。この訓練を契機に、避難所についても地域と行政が共通の認識に立つことができ、また、学校が町内会やコミュニティと連携したことで、協力関係がさらに強化されました。

防災訓練実施までのプロセス

（１）学校と地域が連携した防災訓練の必要性和、地域が共通認識にたつための議論

今回の防災訓練は、過疎化によって広域化した学校区で、災害時に児童が安心して安全に帰宅するには、学校と地域がどのように連携すればよいのかという問題意識から始まりました。訓練実施までのプロセスと、そこでの論点と改善点について順を追って紹介します。

訓練に先立ち、7月23日にコミュニティ振興協議会長、安全対策室長、総代会長、小学校長、柏崎市役所市民活動支援課、PTA、それにNIEDが加わり、北条地区の災害時における避難所などをめぐる現在の状況について、共通認識に立つための議論が行われました。

小学校が1つに統合され、児童の通学距離が長くなっている状況にあって、学校の授業中に地震

が発生したことを想定して、さまざまな事態に備えることができる防災訓練を行う必要があることが認識されていきました。被災の程度によっては小学校だけでは対応できず、地域との連携が必要な事態も想定され、数日間、自宅に帰ることができない児童が出ることも想定されます。避難所などの物理的な場所と情報を集約する場所（情報センター）をどのように用意するのか、そして地域の情報共有について、スター型の情報共有だけでなく、横の情報共有ネットワークも考える必要があることが議論されました。

さらには、平日の昼間授業が行われている時に被災した場合の具体的な対応を考えておくことは、学校、地域、父兄にとって極めて重要なことであること、そして学校と地域が連携した防災訓練を実施することが必要なが共通に認識されました。小学校の校長先生からは、中越沖地震の時は休日だったが、仮に授業がある日だったとしたら、総合防災ということをして避けて通れず、今回のような訓練が必要であることを感じていたことが語られました。ただし、最初から複雑なことはできないため、まずはシンプルなもので、学校単独でやっていたものを地域、保護者を巻き込んだ形の訓練を行うことが提案され、了承されました。

また、現在合同小学校の校舎となっている北条南小学校は耐震性の観点から避難所として使用するには問題があるため、防災訓練では一旦グラウンドに避難した後、耐震補強された北条中学校に

移動することになりました。

（２）防災訓練の前提と訓練内容の決定

この話し合いの結果をふまえて、8月20日にさらに具体的な防災訓練計画について議論しました。

NIEDから、今回の訓練に際して災害に関する前提条件として、「平日の昼間（全児童が就学時間中）に地震が発生し、北条地区で震度6強の震度を記録したと想定する」ことを提案しました。学校と各町内を結ぶ道路の数箇所に亀裂などの障害が発生したため、旧北小学校区へのスクールバスが運行できなくなったとの想定に基づき、以下の3つの訓練案が提示され、議論を詰めていきました。

【訓練1】災害直後の避難行動・安否確認（15時～15時30分）

- ・「地震発生。校庭に避難」の校内放送を合図に各クラスで先生の誘導に従い、全校児童が校庭に集合する

- ・点呼を行い、児童、教職員全員の行方不明者の有無、安否を確認する

【訓練2】学校での情報の集約と地域への報告（情報連携）（15時30分～15時45分）

- ・安否確認結果について防災無線を通じてコミュニティ（および市役所）に通知する

- ・災害対策本部と各町内会との情報連携

- ・次の3つのケースで連絡する

- ①全員無事な場合（けが人、行方不明者なし＝全員無事）

- ②けが人が発生した場合（救急搬送要請、手当の指示など）

- ③行方不明者が発生した場合（状況報告、捜索など）

7月23日 第1回会合（共通認識にたつための議論）

コミュニティ振興協議会長、総代会長、安全対策室長、コミュニティ主事、小学校長、柏崎市市民活動支援課、PTA、NIED

8月20日 第2回会合（被害想定、タイムラインの提示）

コミュニティ振興協議会長、総代会長、安全対策室長、コミュニティ主事、小学校長、NIED

現地視察（北条合同小学校、北条中学校）

8月21日～9月3日 地域と学校での詳細計画作成

小学校長、コミュニティ振興協議会長

9月4日 防災訓練の実施

北条合同小学校の児童・先生、北条コミュニティ関係者、各自主防災会

学校と地域が連携した防災訓練までのプロセス

【訓練 3】児童の保護者・地域への引き渡し(15時45分～16時30分)
・生徒について被災状況から3つの集団に分ける

- ①南小学校周辺在住で、震災後、家族が迎えに来られる児童
 - ②北小学校周辺在住で、震災後、家族が迎えに来られる児童
 - ③家族が迎えに来られない児童
- ・①②については一定の時間になったら家族に引き渡されると考え、そのまま帰宅。③については一旦中学校の避難所へ移動し、その後帰宅(中学校の協力と了解が必要)。

この提案に対して時間配分が検討され、今回の訓練では、訓練2、訓練3についてケース分けをせずシンプルに行うこととし、ケース分けした場合の対応については、

来年度以降行うこととしました。

この日は、防災訓練が行われる北条合同小学校と北条中学校の現地視察を関係者全員で行い、小学校の校舎と体育館に耐震性の問題があることや、耐震補強された体育館を2階にもつ中学校について、議論だけでは分からない点を確認しました。その後、最終的な被害想定(表1)を行い、各主体別時系列対応表(表2)で検討したうえで、最終的にコミュニティ会長と小学校長との間で詳細な訓練計画(表3)が作成されて、訓練は実施されました。

また、閉舎となった北条北小学校が現在でも市の避難所に指定されている問題も指摘され、コミュニティ振興協議会長が関係部署に事実関係と各々の認識を確認した

結果、避難所として使えないことがわかりました。このように地域と関係部署が意見交換し、その場で解決できることをすみやかに処理したことで、互いの協力関係が強化されることとなりました。

防災訓練の実施

訓練は、2009年9月4日(金)午後2時30分から行われました。事前の調整で、当初予定の午後3時より30分早いスタートとなりました。中越地震、中越沖地震を経験し地震の怖さを体感している児童たちは、先生方が緊張感をもって取り組まれていることを感じ、極めて真剣に訓練を行いました。

教室で授業を受けていた子供た

表1 防災訓練における北条地区の被害状況想定

北条地区の被害状況：平日の昼間(全児童が就学時間中)に地震が発生し、北条地区で震度6強の震度を記録したと想定する。被害は、旧北小学校校区が大きく、学校と旧北校区の各町内会との間の道路に障害が発生し、スクールバスが運行できなくなったと考える。地域の被害状況は、以下のとおりである。

インフラ	死傷者	建物	住宅火災	電気	ガス	水道	通信	避難所
地域全体の被害状況	死者なし。負傷者は全町内会で数名。	耐震補強されていない建物は、大きなダメージを受ける。全体で、住宅の全半壊10棟。	コミュニティのなかで2カ所火災が発生。	発災後、停電。(翌々日に昼には復旧。)	プロパンガスであるため、地震後、火は使える。一部で、ボンベが倒れるものの被害なし。	水道は断水。水は、近所の井戸から汲み上げる。全体が復旧するには数週間。	固定電話・携帯電話は不通。通信手段は、町内会に配備された防災無線のみ。	旧北小学校が避難所として使えないため、避難所が不足。
コミセン	死者、負傷者なし。	壁にひびが入るものの、大きなダメージなし。	—	発災後、停電。自家発電。	プロパンガスであるため、地震後、火は使える。	水道は断水。水は、コミセン横の井戸から汲み上げる。	固定電話・携帯電話は不通。通信手段は、防災無線のみ。	避難所として使えるが、収容人員が少ない。
小学校	死者、負傷者なし。	耐震補強されていないため、大きなダメージを受ける。	—	発災後、停電。	プロパンガスであるため、地震後、火は使える。	水道は断水。	固定電話・携帯電話は不通。通信手段は、配備された防災無線のみ。	避難所としては使えない。
中学校	死者・負傷者なし。	校舎と体育館を結ぶエクステンションにひびがはいるものの、大きな被害なし。	—	発災後、停電。自家発電。	プロパンガスであるため、地震後、火は使える。	水道は断水。	固定電話・携帯電話は不通。中学校には防災無線が配備されていないため、通信手段なし。	避難所として問題なく使える。
その他	震災後、天候悪化し、斜面災害が起こる可能性がある。							

表2 各主体の時系列対応表 実際の想定と今回の訓練の一部(北条合同小学校のみ)

時間	実際・訓練	主体	15:00～15:15	15:15～15:45	15:45～16:30
被害復旧状況					
テーマ			災害直後の避難行動・安否確認	学校での情報集約 地域との情報連携	児童の保護者・地域への引き渡し
北条合同小学校	実際の想定	児童	児童は無事。先生の指示に基づいて、グラウンドに避難。	グラウンドで待機	学校に迎えに来た父兄がいる児童は、父兄とともに帰宅。迎えがない児童については、中学校に移動。
		校長先生	ハンドマイクで、避難を呼びかける。児童をグラウンドに移動させる。	コミュニティに3つのケースで連絡する。①全員無事な場合、②けが人が発生した場合、③行方不明者が発生した場合。	地区災対本部と防災無線で連絡をとり、地域の被災状況を把握する。なお、地域の被災状況が把握されたことで、自宅に帰らない方がよい児童がでる可能性が想定される。
		教職員	児童を速やかに教室からグラウンドへ避難させた後、クラスごとに安否確認。	校長に情報を集約する。	児童の引き取りが可能な父兄には、小学校まで迎えにきてもらうよう連絡。父兄の引き取りが難しい児童は、避難所(中学校)に向かう。
	今回の訓練	児童	今回の訓練では、児童はグラウンドに移動し、クラスごとに点呼した結果、 一人児童が教室に残っていることが判明する。	グラウンドで待機	父兄とともに帰宅する児童と、中学校に移動する児童に分かれる。
		校長先生	今回は、 校内放送 で避難を呼びかけ、児童をグラウンドに移動させる。	今回は①全員無事な場合と、③行方不明者が発生した場合を想定して行うが、②けが人が発生した場合については緊急搬送要請、手当の指示を行わなければならない。	地区災対本部と防災無線で連絡をとり、地域の被災状況を把握する。
		教職員	今回は、 担任の先生が不明の児童を捜索発見し、全員の無事が確認された。	校長に情報を集約する。	児童の引き渡しが可能な父兄には児童を引き渡す。また、父兄の引き取りが難しい児童については、中学校に移動し、町内会毎の児童名簿に基づいて町内会長へ引き渡す。

※赤色は、今回の訓練で行わない項目、および「実際の想定」とは異なるが今回訓練する項目を示す。

表 3 北条地区合同避難訓練（時系列）

2009 年 9 月 4 日

14:28	訓練通告	「訓練、訓練、北条南小学校、北条北小学校合同災害避難、北条地区防災会引渡訓練を行う。」
14:30	地震発生	15 秒
	一次避難（校舎内）	揺れ（非常ベル）が続いている間（担任指示）
14:32	二次避難（グラウンド）	揺れが収まり次第、教頭指示「避難、避難、グラウンドへ避難」
14:40	避難完了	「〇年 在籍〇〇名、欠席〇名、現在員〇〇名、避難完了、（けが人が〇名います）」 「〇年 〇名不明者がいます。」←「再度点呼し不明者を確定せよ」 「〇年 〇〇不明です。」←「二人行動で捜索せよ」
14:41	健康状況、欠席者の把握	「欠席者の氏名、学年、町名を把握し、北条地区防災本部へ報告せよ。」
14:42	地区避難所への経路の安全確認	「踏切および農道の避難経路の安全を確認せよ。」（道路状況、踏切、電柱、支柱）
14:45	地区無線連絡①	「訓練、訓練、こちら北条合同小学校。北条地区防災本部どうぞ。」 「南北両校グラウンドへの避難完了。6 年男子 1 名が校舎内に残っていると思われる。現在捜索中。人的被害なし。校舎一部損壊。欠席者 1 名、家近町内、加藤▽▽君。町内会への安否確認をお願いします。繰り返します。南北両校グラウンドへの避難完了。6 年男子 1 名が校舎内に残っていると思われる。現在捜索中。人的被害なし。校舎一部損壊。欠席者 1 名、家近町内、加藤▽▽君。町内会への安否確認をお願いします。どうぞ。」
14:46	不明児童発見報告	「6 年、不明児童発見しました。在籍〇〇名、欠席〇名、現在員〇〇名、避難完了」
14:47	経路の安全確認報告	「報告、避難経路は確保され、通行可能です。」
14:47	本部連絡指示	「これから体育館脇を通して、県道歩道、農道を経由して中学校へ移動する。防災本部へ中学校への受入要請、合わせて保護者、町内会への引渡要請を連絡せよ。」
14:48	地区無線連絡②	「訓練、訓練、こちら北条合同小学校。北条地区防災本部どうぞ。」 「6 年不明児童 1 名無事発見。6 年不明児童 1 名無事発見。ただいまから、校舎管理者 2 名を残し、全校で北条中学校へ移動します。中学校への受入要請をお願い。避難経路は、県道歩道→農道→中学校駐車場。」 「なお、併せて保護者、町内防災責任者への引渡連絡をお願い。」
14:50	地区無線返信①	「訓練、訓練、こちら北条地区防災本部。北条合同小学校どうぞ。」 「北条中学校受入了解。なお、欠席者の安否については確認中。」
14:51	移動指示	「これから学年毎に中学校へ移動を開始する。移動経路は、バックネット脇→県道歩道→農道→中学校駐車場。踏切、電柱、電線に十分注意せよ。中学校駐車場で町内毎に再整列・点呼せよ。」 「△△教諭、□□用務員はここに残り、来校者の中学校への誘導指示をせよ。」
	(町内会連絡)	
14:52	三次避難（北条中学校）	グラウンド→県道歩道→農道→北条中学校駐車場 (▲▲教頭、1 年～6 年、級外職員)
15:00	地区無線返信②	「訓練、訓練、こちら北条地区防災本部。北条合同小学校どうぞ。」 「欠席者の安否については、家近町内の加藤▽▽、町内に家族と共に避難、異状なし。」
15:05	北条中学校着	北条中学校駐車場で、町内会毎（登校班）に整列する。引渡簿、筆記用具の準備
15:10	町内会毎に点呼、引き渡し、報告	担当職員が点呼。担当職員と町内会担当者がそれぞれ引渡簿でチェック。 →教頭へ報告「〇〇町内〇〇名、異状なし。」→町内会ごとに署名交換・引き渡し。
15:16	引渡状況報告	「峠、吉井黒川を除き、町内会への引き渡しを完了しました。」←「状況を本部に通告せよ。」
15:17	地区無線連絡②	「訓練、訓練、こちら北条合同小学校。北条地区防災本部どうぞ。」 「北条中学校への避難完了。各町内への引渡状況を報告する。峠、吉井黒川を除き、引き渡し完了。峠町内会、吉井黒川町内会へ連絡願います。」 「校舎、校地の被害状況については、追って連絡する。どうぞ。」
15:18	地区無線連絡③	「訓練、訓練、こちら北条合同小学校。北条地区防災本部どうぞ。」 「被害状況を報告する。人的被害なし。校舎一部損壊。グラウンド一部ひび割れあり。小学校前県道一部陥没。北条中学校、電気、水道、不通。支援物資、飲料水の支給願います。」
15:19	地区無線返信③	「訓練、訓練、こちら北条地区防災本部。北条合同小学校どうぞ。」 「了解。市役所災害本部へ至急要請いたします。」 「以上で、両小学校との避難訓練を終了いたします。関係者には、ありがとうございました。」
15:20	全体講話	
15:30	北条中学校発	登校班毎に（杉平～南条）
15:45	帰校	集団下校
16:00	下校	スクールバス 16：05

※赤色は、表 2 の想定と異なる点。段階的にリスクコミュニケーションが高まっている。

ちは、緊急放送ののちグラウンドへ移動、点呼と安否確認が行われました。その後、耐震補強された避難所（体育館）がある中学校まで移動し、各町内会ごとに集まり、町内会長に児童たちが引き渡され、訓練は午後 3 時 26 分に終了しました。

防災訓練の成果と反省

今回は、7 月 23 日に第 1 回打ち合わせ、9 月 4 日に訓練実施という極めて短い準備期間で行われ

ました。当初 10 月に予定していましたが、秋は小学校の行事が目白押しで上記日程以外に行うことができないという学校の事情がありました。その中で、北条コミュニティ振興協議会長をはじめとする関係者、総代会長、小学校長、PTA、柏崎市役所市民活動支援課、NIED が集まり、災害時に学校と地域が連携して子供の安全確保を図っていく必要があることが確認されたことは、地域にとっての大きな成果だと考えます。

事前の打ち合わせ段階で、従来

避難所として指定されていた北条北小学校が閉舎になり使えない状態にあること、北条合同小学校の校舎の耐震性に問題があることなど、それまで関係機関で認識が異なっていた事柄が共通認識となり、地域の協力関係が再編され、より強固なものになりました。これらの共通認識は、指定避難所について、柏崎市の地域防災計画の改訂において見直されることに繋がると考えられます。地域からのガバナンス再編の有効性を考えるにあたっての良い事例だと考えてい

ます。

情報ネットワークについては、北条合同小学校にも防災無線の子機が配置され、災害で電話が不通になっても、コミセンや町内会と連絡をとることができるような仕組みができました。またコミセンを地域の災害対策本部としてすべての情報を集約するスター型ではなく、横のネットワークも視野に入れ、第二、第三の本部を考えておく必要があることも、今後の課題として挙げられました。

避難経路などの災害時に必要な情報については、現在 NIED とともに WEB 上に防災マップを作成中ですが、今後は地域の方々が情報を書き込むことで、さらにその精度を高めていくことも確認されました。防災マップでは、行政が把握している危険箇所に加えて、地域の方が把握している危険箇所の情報を付加することが可能で、より実地的な防災マップとして活用することができます。

さらに、訓練の準備段階で最も重要なことが、児童名簿の学校と地域との共有です。児童を地域と学校で守るという趣旨のもと、小学校で保護者の承諾をとっていたが、今回の訓練を行うことができました。このことも、訓練の大きな成果だと言えるでしょう。

一方反省点としては、準備期間が短かったため、コミュニティの防災訓練の中での位置付けや、訓練の全体像などが各町内会長まで共有しきれなかったことが挙げられます。後述の「成果、反省と今後の課題」で、関係者から指摘さ

れているように、実際の災害時の対応と今回の訓練の対応を明確に分けて、行う必要がありました。

次に、各町内会長が使用していた防災無線の子機が 1 力所に集まった結果、混線してしまったことが挙げられます。今回のように 1 力所に集中的に防災無線の子機が集まる可能性は低いと思われますが、訓練における無線の使い方にも配慮する必要があります。

また災害対策本部であるコミュニティセンターにはコミュニティ振興協議会長（本部長）が一人で行っており、災害時には本部であるコミセンにはもう数名配置するような体制が必要でした。

防災訓練をきっかけにした地域ガバナンスの再編と強化

訓練の結果、地域の避難所の問題など各主体によって異なっていた現状認識が共通認識に変わり、今後の災害対応が実際的に行えるようになったと考えられます。

北条地区にかかわる主体がこの防災訓練を機に一同に会し、それぞれの認識と現状の状況を意見交換し、その場で解決できることを解決したことは、学校と地域にとつての最初の大きな一歩となったと思います。また、被害想定（表 1）、各主体の時系列対応（表 2）や、地域の主体での時系列の訓練計画（表 3）を通して、リスクコミュニケーションが段階的に深化し、各段階のリスクコミュニケーションが相互補完的に機能していることが確認できました。



耐震性に問題がある北条合同小学校体育館



耐震補強されている北条中学校体育館

児童を学校から町内会長に引き渡す際に、町内会長を知らない子供たちは不安な顔をのぞかせました。防災訓練を通して、子供たちも大人も、地域における日常のコミュニケーションが重要であることを認識しました。

学校、町内会、コミュニティ、行政などが連携し、地域課題を解決することは極めて重要ですが、それとともに、日常の地域での交流が重要であることが、この防災訓練を通して分かったと言えるでしょう。今後、直接的な防災力のみならず、間接的な防災力の充実に図っていく必要があることを再認識することができた防災訓練でした。

今後に向けて

2010 年度は、中学校も訓練に加わり、地域と小学校、中学校が連携した防災訓練が行われる予定です。今回は農繁期と重なったこともあり、父兄の参加はありませんでしたが、次回は、中学校の体育館（避難所）まで避難し、避難所内での児童の位置取りや、中学生との連携、そして中学生と地域との連携なども訓練しようと考えています。また現在、養成講座が始まっている北条ネットの市民レポーターによる災害時の情報発信や、防災マップを活用した訓練なども行い、災害に対する地域の総合防災力を向上させていきたいと考えています。

（三浦伸也）



北条合同小学校から北条中学校への避難経路

学校ー地域連携型防災訓練を終えて ＜成果、反省と今後の課題＞

【学校関係者】

●斎喜和彦さん(北条南小学校校長)

今回の防災訓練で本部長を務めました。事前にこの訓練計画を立てる際に中学校までの避難経路や避難時間を考慮していましたが、実際に歩いてみて意外に危ない箇所があることがわかりました。避難の最中に踏切で列車が通過しましたし、電柱もあれば、おそらく道路が陥没する箇所もあるでしょう。そういう点を確認できたのはよかったと思います。

当初から、少し強めの大きな声で緊張感をもってやろうと考えていたのですが、少し緊張し過ぎたかもしれません。またあらかじめ作成していたシナリオに合わせなくてはいけないという意識が強く、混乱した部分もありました。もう少し簡素な基本マニュアルを作って、それを点検していくというスタイルのほうがよかったかもしれません。確認、点呼、報告の訓練も行いましたが、都度の全体指示が必要だと感じました。

訓練では20数本の無線が使われましたが、中学校に避難した際にはだいぶ情報が交錯しました。避難所ではある程度集中管理してもよいのではないのでしょうか。そのためには避難所本部の設置が必要になりますので、中学校とも一緒に検討したいですね。

町内会長への児童の引き渡しについては、1時間や2時間でできるとは考えていません。ただ各町内がどのような状況にあるかわからない中で、私たちが子どもたちを町内に連れていく、あるいは家に帰すということはできません。ですから、町内の状況がある程度確認されるか、保護者あるいは町内からどなたかが迎えに来ていただいた場合に引き渡し、という体制をとります。それまでは時間がかかっても、学校が責任を持って預かります。

●石塚康也さん(北条北小学校校長)

私は、訓練を客観的に見て評価する立場でしたが、子どもたちはしっかりと先生方の指示に従い、まじめにきちんと行動していましたので、その点では素晴らしい成



果が得られたと思います。一方、先生方は多少パニックになった部分や、各自の報告の仕方、スタイルがバラバラだったために時間がかかり、また受け取る側との意思の疎通がうまくいかなかったところもありましたので、それは今後の課題だと思います。

学校としては、地震に限らずさまざまな防災力を養っていく必要があると感じました。また今回の訓練が、子どもたちにとって価値あるものだったのかどうか、あるいは意味づけといった点についてもよく考えて、取り組んでいく必要があります。自分の命を守るためにも、指示にきちんとしたがって行動する、という意識につなげていくことが大切です。

保護者、あるいは町内の担当者への引き渡しが無理な場合は、子どもたちの安全は学校が責任を持つというのは鉄則です。ただ、保護者以外の引き渡しの場合は、顔を知っている人であれば子どもたちは不安感を持たずにすむでしょう。そういう関係性を日頃からつくる必要があります。学校でもいろいろな行事をやっていますので、ぜひ積極的に参加して、子どもたちと交流してほしいですね。

●青木寛さん(北条南小学校教頭)

無線を担当しましたが、実際にやってみて初めて要領がわかりました。まず相手を確認し、双方の所在を把握して、相手からの情報を聞き、こちらの状況を伝える。情報が交錯した場合には、取捨選

択して進めていかなくはなりません。とにかく実際にやってみることが大事だと思いました。災害時には学校で誰が無線担当になるかわかりませんので、一人一人が経験しておく必要がありますね。

また無線で確認する内容をある程度限定しておいたほうがいいと思います。21の町内会の情報をすべて無線で確認しようとするとうるさく、無線する恐れがあります。伝えなければならない情報の内容についてもマニュアルをつくっておく必要があると感じました。

すべての訓練を行うのはなかなか難しいので、実際に訓練しなければならない要素とマニュアルがあればすむという要素をきちんと分けたほうがいいと思います。

●平間えり子さん(北条北小学校教頭)

今回の訓練では流れが非常によくわかりましたが、場面ごとの的確な指示が出せなかった、あるいは臨機応変に対応できなかった部分もありましたので、訓練の積み重ねが大切だということを実感しました。被災する子どもたちは非常に不安ですから、町内会長さんをはじめ、町内の引き渡し担当者や子どもたちが日頃から顔見知りである、あるいは近所の中学生が一緒だということで、安心感が出てくると思います。

中学校までの避難時間は15分と思いのほかかかりました。先頭に立って、特に1年生の歩みを見ながら動いていましたが、道路状況、あるいは子どもたちの心理状



況などによって、実際にはもっとかかるかもしれません。

【町内会関係者】

●若月哲夫さん（総代会長）

今回の訓練は 60 ～ 70 点ぐらいの出来だと思います。災害時には、地域内の指示命令系統がきちんとしていないとなかなか行動できません。各避難所あるいは学校などそれぞれの場所によって責任者を指定し、その方がリーダーシップを発揮して統制をとっていくことが必要でしょう。

それから災害本部（コミセン）のスタッフは現状の人数では対応しきれません。非常時の場合、誰がセンターに駆けつけられるかということも防災計画の中に入れ込む必要があると思います。

●各町内会長からの意見

・中学校に避難後、子どもたちの引き渡し訓練の際に無線が混乱した。本部から「〇〇町、いかがですか」と呼び掛けてもらったほうが良かった。

・災害時には町内会長は町内の状況把握に追われるため、子どもたちを引き取りに行くのは事実上難しい。町内会が子どもたちの引き渡しに際するシステムにするのであれば、町内でその任に当たる人間を確保する必要がある。

・町内会長は防災本部とのやりとりに追われるため、学校に無線を持っていくことは難しい。学校は独自の防災本部を設けたほうがいいのではないかな。

・引き渡し時の確認シートについて、もう少し簡潔に記入できるような内容にしてほしい。

・中学校までの避難時間をどの程度見ておくかも大切。災害時にすぐに迎えに来る親御さんもいるだろうから、そのときに「中学校に移動した」というすれ違いが起る可能性もある。

・日頃から子どもたちと知り合う

機会を作っておく必要性を感じた。

・各町内の保護者代表にも参加してもらいたかった。

・中学生も一緒に訓練を行うのは非常に良いことだと思う。来年度はぜひ中学校も参加できる防災訓練を実施してほしい。

・子どもたちが真剣に取り組んでいてよかった。災害時にはこうすればいいんだ、ということがお互いに頭に描けたと思う。

【北条地区コミュニティ振興協議会関係者】

●江尻東磨さん（北条地区コミュニティ振興協議会会長）

本日は、北条地区 21 町内会のうち 18 の町内会長に参加していただきました。災害時、町内会長は町内の状況把握や対応に迫られるため学校での引き渡しに際するの難しいという話がありましたが、今日の訓練を通して町内会長が難しければほかの責任者を立てることが必要だということをお互いに理解できたのではないのでしょうか。各町内の自主防災組織図に従って、担当者を選んでいただければと思います。

無線については月 1 回コミセンで訓練を行っていますし、また各町内でも独自に行っていますから、その成果は出たと思います。しかしやりとりが重なって混線した部分がありました。混線した場合は、ルールに基づいて対応することになっておりますので、徹底させたいと考えております。

コミセン本部の体制については、以前の地震の際には 3 ～ 4 人でしたが、各地区への物資の支給や補給まで手が回りませんでしたので、10 人程度に増やすことを考

えています。今回の結果を検証しながら、今後の防災体制や整備に反映させていきたいと思います。また 危険箇所等については改めて町内会長と一緒にチェックし、できるところは改善するなど、引き続き地域の方々の安全確保に向けて努力していきたい。安全と安心を確保することで明るいまちづくりができると確信していますので、防災意識を高めるためにも、大人も子どもも交流できるような取り組みを進めていきたいと思っています。

●戸田洋子さん（北条地区コミュニティ振興協議会主事）

防災組織が立ち上がったこともあり、皆さんが意識をもって行動してくださったことが良かったと思います。ただコミセンに設置した防災本部を江尻会長一人にまかせてしまう結果となりましたので、このあたりの人員体制、配置は今後検討していきます。

これまでは北小学校、保育園、南小学校の周囲に子どもたちがたくさんいましたが、合同小学校になってその様相も変化しました。学校と地域が積極的に情報交換して、本音で話せるような環境をつくっていききたいですね。

協議会では、コミュニティ祭りのときに中学生にボランティア活動で参加してもらい、そこに小学生もかわるという仕掛けを意図的に行っています。中学生の活動を見て、小学生に「ぼくらは中学生になったらやるんだ」という意識を持ってもらいたい。これからも子どもたちの参加を積極的に促すような仕掛けをしていきたいと思っています。

9月4日防災避難訓練用

北条地区 非常時児童引渡簿

引渡日時	平成 年 月 日 ()	午前・午後	時 分
引渡者	北条南小学校 職名	氏名	
引受責任者	氏名	年齢	男・女
住 所	柏崎市大字		
電 話	0257 - -		

引渡児童数（合計 人）			
学年	人数	学年	人数
1 年		4 年	
2 年		5 年	
3 年		6 年	

No.	学年	児童名	ふりがな	保護者名	住 所	地区名	自宅電話	兄弟姉妹関係	安否確認(○)	その後の状況
1	1	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇1784	〇〇	〇〇-〇〇〇〇			
2	1	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇133	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(4)		
3	1	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇1979-2	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(4)		
4	2	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇96	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(4)		
5	3	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇124	〇〇	〇〇-〇〇〇〇			
6	3	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇173	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(5)		
7	4	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇133	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(1)		
8	4	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇96	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(2)		
9	4	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇1979-2	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(1)		
10	5	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇173	〇〇	〇〇-〇〇〇〇	〇〇(3)		
11	6	〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	〇〇 〇〇	〇〇104	〇〇	〇〇-〇〇〇〇			

備考

柏崎市立北条合同小学校



2010 年は 4 年に 1 度大規模な防災訓練を行う計画ですので、今回の訓練の成果、反省と課題を整理した上で、また NIED から提案いただいている防災ドラマの企画も盛り込みながら、実施したいと考えています。

●吉川公一さん（北条地区コミュニティ振興協議会安全対策室長）

学校と地域が一体となった防災訓練というのはあまり例がありませんから、意義があったと思います。無線については使い慣れていないと時間がかかりますので、まずは慣れていただくことが大切です。町内会長は日頃から訓練しています、学校の先生方含め、町内会長以外の方にも使用していただく機会があるとよいですね。また、1カ所に集まった場合は誰か代表者が取りまとめて対応するほうが早いし、正確です。いろいろ問題点も出ましたので、これを今後の訓練に生かしていきたいです。

●品田純子さん（北条地区コミュニティ振興協議会安全対策室員）

子どもの引き渡しについては、本当は保護者が一番良いと思いますが、すぐに来られない保護者もいます。子どもの状況、保護者の状況を理解していただく上で、今日の訓練は意味のあるものだと思います。たとえ町内会長が出てこられなくても、災害時にはこういう対応が必要だということを各町内で話し合っただけであればありがたいですね。それによって保護者も学校と協力しようという意識を持てるでしょう。

【行政関係者】

●駒野龍夫さん（柏崎市防災・原力課長）

地域と学校が連携して、地域に子どもたちを引き渡すという訓練は私も経験がありません。防災計画上は、学校の児童・生徒は先生

方が責任を持って対応するとしておりますが、しかしこうしたやり方も地域によっては考えなくてはならない、という新たな提案をしていただいたと思っています。

先生方も限られた人数の中で、すべての子どもたちを家に帰すというのは大変です。また通学路が実際にどのような状況になっているかわからない中では、地域からの情報は非常に重要です。その意味でも、地域と学校が連携する必要があります。

今回は小学校、中学校が合同で訓練を行うという計画もあるようですので、今日の反省も踏まえて、繰り返し訓練を続けていただきたいと思います。

【防災科学技術研究所関係者】

●長坂俊成（NIED 主任研究員）

今回の訓練では、固定電話、携帯電話、あるいは携帯メールという通信手段が使えないという前提で無線を使いました。時間の経過によっては携帯電話が通じるでしょうから、災害用伝言ダイヤル「171」などもうまく活用できればいいですね。災害時には町内も被災しますし、要援護者の安否確認やけが人の対応に追われることは十分に考えられますから、町内から子どもの引き渡しのために学校に来られるかどうかという点は検討が必要ですね。避難施設となる中学校に近接していますし、中学生が安全確認などについて学んでいれば、町内会ごとに小学生を送り届けることも可能だと思います。

また今回は子どもたちを親御さん、あるいは町内会の担当者に引き渡すというシナリオでの訓練でしたが、被災状況によっては中学校で避難所生活に入ることも考えられます。その場合は児童がそこで一定期間を過ごすという場面を

想定し、学校と地域がどのように役割分担を行い、どう連携するのかについても考えておく必要があります。さらに、負傷者が出た場合の緊急対応の方針やルールも決めておいたほうが良いと思います。

●三浦伸也（NIED 研究員）

子どもたちがまじめに取り組んでいたことが非常に印象に残りました。避難場所の中学校はすぐそこに見えたので、避難時間は 5 分ほどと想定していたのですが、予想を超えて約 15 分間かかりました。また、町内会ごとに児童を引き渡す作業にも 13 分ほどかかっています。引き渡しの際に皆さんが感じられたと思いますが、子どもたちと地域の方々が日常的に交流できるような機会がもう少しあるとよいですね。今回は北条中学校もぜひ参加したいとのことですので、一緒に取り組んでほしいです。

そして、訓練でやるべきことと災害時にやるべきことを分けて考えておくことも重要です。

●坪川博彰（NIED 研究員）

今回の訓練では災害本部となるコミュニティセンターで対応されたのは江尻会長一人でした。災害時には会長はたくさんのやりとりをしなければならない状況になるでしょうから、センターにもう 1～2 人配置するような体制が必要でしょう。

また、NIED が提供する e コミ 2.0 には地域の情報を地図で共有するシステムがあり、プリントアウトすることも可能です。地図で地域の情報を知るということは災害の基本ですから、その地図を、学校、コミセン、町内で共有して状況を把握することができればいいですね。

（2009 年 9 月 4 日実施）



北条コミュニティセンターで行われた反省会

柏崎市北条コミュニティ —その取り組み、今後の課題—

北条コミュニティは市の北東部、中山間地に位置するコミュニティです。2004年の新潟県中越地震の際には、柏崎市のコミュニティでは最も震源に近かったことから、死者こそ出なかったものの大きな被害を受けました。山間地のため道路の陥没などが発生したこともあっていわゆる孤立状態になり、被害状況の把握に手間取りました。さらには被災者への支援活動に地域差が出たり、コミュニティセンターに問い合わせが集中し対応に限界があったことなどの課題が指摘されました。これらの教訓から北条コミュニティ内の21の町内会すべてに自主防災組織を結成させ、独自の災害対応ができる体制を整備し、2007年の中越沖地震の際には19町内で自主防災体制ができあがっていたため、コミュニティとしての災害対応体制は非常に迅速でした。

また、北条コミュニティは柏崎市に編入される前は北条町として独立した地域だったため、根強く残っていた旧集落のネットワークが災害対応に生かされました。自主防災組織も基本的には既存の町内会組織がそのまま兼ねる形で成立しています。

こうした平時からの地域内でのさまざまなつながりが災害時に有効に働いた一つの事例が、北条人材バンク（北条地区助け合いセンター）です。北条人材バンクは人口の4割近い高齢者がいる現実と今後さらに進む高齢化を見据え、住民自身による地域での助け合いが必要という構想から地域内で自主的に開始されたもので、2002年4月から稼働しています。その支援活動には、①福祉（通院介助、車いす手伝い、高齢者の話し相手、簡易な介護など）、②家庭生活（使い走り、買い物、掃除、洗濯、調理、留守番など）、③屋内外作業（草取り、畑仕事、樹木の剪定、家屋の修理、屋根の雪下ろしなど）等が含まれています。

もう一つ、独自の取り組みとして、災害時要援護者台帳の整備があります。現在でこそ全国さまざまな地区で取り組まれています。北条コミュニティではこれを先取りする形で制度をスタートさせました（手上げ方式、同意方式）。

さらにコミュニティビジネスの先駆的取り組みとして注目したいのが、手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖（だんだん）」の活動です。



北条ふるさと市場「暖暖」

過疎と高齢化が進み、地域の食料品店がどんどん少なくなっていく現状にかんがみ、高齢者向けの総菜などの食事作りを住民自身の手で支えるための仕組みで、このような活動が地域の連携の輪を支えていると言えます。

北条コミュニティの人材バンクや総菜事業所「暖暖」などの活動は、2002年に設立された「北条地区助け合いセンター」などの北条コミュニティの住民の主体的な取り組みがあったことに起因していますが、一方で前述したように、2003年の「柏崎市市民参加のまちづくり基本条例」の制定をきっかけに、「地域コミュニティ計画策定補助金」「コミュニティ管理運営事業補助金」「地域コミュニティ活動推進事業補助金」が支援制度として働いたことが、地区自治の自律性を高めたと考えられます。

こうした地域コミュニティを人的、財政的にバックアップする法制度をベースに、北条地区では2007年にNPO法人「北条人材バンク」を設立し、地域課題の解決に取り組んでいます。

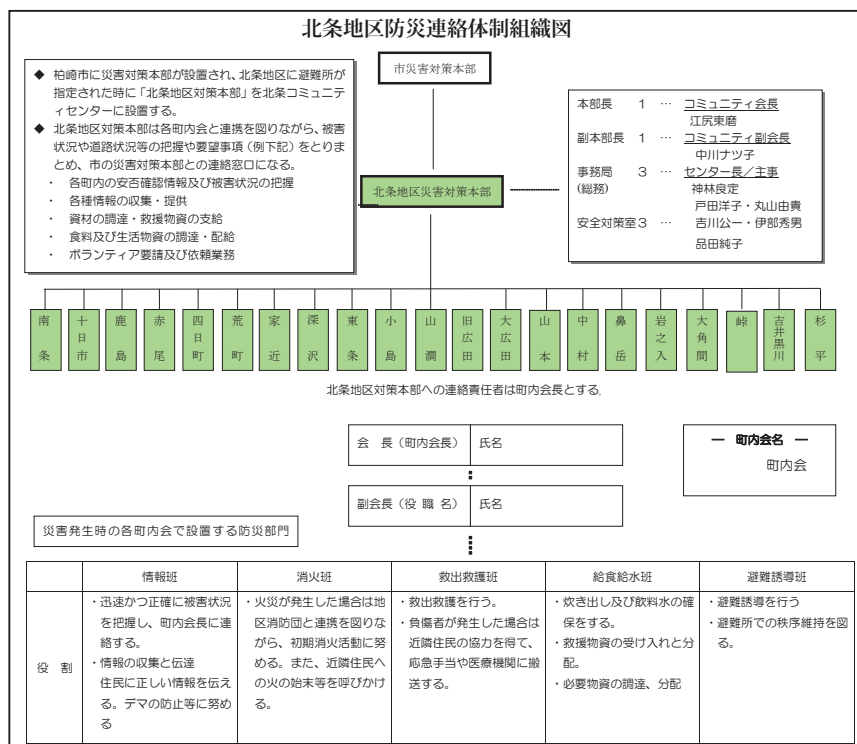
【地域課題と、その解決方策】

・災害対策の更なる整備→地区災害対策本部の高度化、地域内外とのネットワーク、初動対応マニュアルの作成、学校と地域が連携した防災訓練

※今回行われた訓練はこの一環です。

・地区民のふれあい、集いの充実→地域内（外）のネットワークづくり

・広報の充実→地域からの情報発信（北条ネットの創設）、広報部員の育成



- ・教育、歴史→小学校の安全安心マップの再点検、地域文化資源の保存・活用
- ・「暖暖」のさらなる充実→レシピ開発、情報発信、防災グリーンツーリズムとの連携
- ・「つららなす」→ 安定的な生産・出荷（軌道に乗せる）
- ・防災グリーンツーリズム → 休み処や宿泊施設の整備、ボランティアガイドの育成



北条の特産物「つららなす」

地域コミュニティにおける人的ネットワークや、組織を設立するに当たって必要な情報、ノウハウが地域のナレッジとして蓄積されることで、平常時の地域コミュニティのガバナンスが高まり、包括的自治機能をもつコミュニティに転換すると考えられます。

北条コミュニティにおいても、こうした取り組みがリスクガバナンスの潜在力として機能し、中越沖地震発生時の地域コミュニティの迅速な対応につながったと言えるでしょう。

2009年10月18日に行われた「北条コミュニティ祭り」の様子



北条合同小学校3～4年生による新しい校歌「北条賛歌」の合唱



災害時を想定し、各自持ち寄った材料で災害鍋を振る舞う



地域内の情報共有と地域外への情報発信、平常時・災害時の情報共有・情報発信、地域情報アーカイブの作成などを目的に立ち上げた「北条ネット」。NIEDが開発したeコミュニティプラットフォーム2.0を利用している。



2つの大震災を経験して

北条地区コミュニティ振興協議会会長 江尻東磨さん

地震が発生したら、自分のことは自分でやる、ということが基本です。大体2日間は行政も動けませんから、救援物資が届くまでの間は自分たちで炊き出しやお年寄りの世話をしなければなりません。そして要援護者の安否確認については台帳が無ければできません。北条地区では各町内会長に協力してもらい、要援護者台帳をつくり、市の防災課と北条コミュニティの防災本部に1部ずつ、さらに各町内会には町内会だけの台帳を整備しています。プライバシーの問題もあり、「名前を出すのはいやだ」という方もおられましたが、しかし地震に遭遇したら助けなければなりません。台帳を整備し、機密事項として厳重に管理することが必要です。

向こう三軒両隣という言葉がありますが、普段のお付き合いはとても大切です。地震が起きた時に、隣近所がどのような状況、環境にあるかを把握するためにも、私たちは緊急連絡先をつくっています。実際に過去の地震の際には、関西や関東方面のご親戚から「家にいるはずで、電話は鳴っているけれど全然出ないがどうなったのか」といった電話が来ること

もありました。その際に「〇〇さんは無事で避難所にいますよ」とか、あるいはまた「怪我をされて△△病院に入院しています」といった情報をお伝えすることができます。

防災マニュアルは簡単簡潔が一番です。防災マニュアルを見なければ動けないようではいけません。「頭に入れた防災」で結構なのです。それから学校には教室から運動場、屋外に出るという防災マニュアルがありますが、そこから家庭まで誘導する、無事に家に帰すためのマニュアルはありません。今回は学校から各町内会に児童を引き渡す訓練を行いました。学校と地域の常日頃からの協力関係が大変重要だと感じました。また避難所の耐震性の調査も事前に行っておく必要があります。訓練では合同小学校の体育館の耐震性に問題があるため、耐震補強された北条中学校を避難場所としました。

まずは地域の行事にできるだけ参加し、住民同士が仲良くなれば、防災組織も早くできます。地域が一丸となって防災組織を立ち上げ、災害に対する備えをしていただきたいと思います。

柏崎市北条コミュニティの取り組み ー北条ネット、市民レポーター養成講座、地域間交流ー

北条コミュニティの取り組み

新潟県柏崎市では、旧自治省（現総務省）が推進したコミュニティ政策を契機にコミュニティセンターが建設され、現在 32 のコミュニティ組織が存在しており、この組織が地域住民主体による災害対応活動に重要な役割を果たしています。

そのコミュニティ組織の一つである北条コミュニティは柏崎市の東部に位置し、人口約 3400 人、面積は 44.78km² で JR の駅が 3 つもあるほどの広大な地域です。北条コミュニティでは、中越地震（2004 年 10 月 23 日）と中越沖地震（2007 年 7 月 16 日）という 2 つの大地震に見舞われましたが、その教訓を生かし、地道な取り組みを行ってきました。自主防災体制の整備はもちろんのこと、平常時からの地域内でのさまざまなつながりが災害時に有効に働くとの観点から、北条人材バンク（北条地区助け合いセンター）、災害時要援護者台帳の整備、手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖（だんだん）」など多彩な取り組みを実践し、地域課題の解決を目指しています。詳細については、28～29 ページの「柏崎市北条コミュニティその取り組み、今後の課題」をご参照ください。

この章では、地域の総合防災力のさらなる向上を目指し、北条コミュニティが現在取り組んでいるさまざまな事例を紹介します。

地域からの情報発信 ー北条ネットの創設ー

北条ネットは、北条コミュニティ（内部）における情報の共有と、北条コミュニティ外（外部）への情報発信、そして平常時、災害時の情報共有・情報発信、さらには、北条の文化資源、地域資源のアーカイブを作ることなどを目的にしています。専門的な知識がなくても操作できる仕組みを活用し、地域のコミュニケーションの向上に寄与することを目指しています。

本サイトは、NIED が開発した、地域社会を支える参加型の Web シ

ステム「e コミュニティ・プラットフォーム 2.0」* を活用しており、防災や防犯にも役立つ機能も搭載しています。e コミは NIED の災害リスクガバナンス研究プロジェクトの実証実験の場でもあります。

2009 年 8 月 20 日に第 1 回の北条ネット講習会を開き、NIED からその機能と使い方について紹介しました。当日は 10 名ほどの参加があり、ワープロ感覚で自分やグループのブログが作れることを体感していただきました。今後も可能なかぎり講習会を開催し、北条の多くの方々に使っていただきたいと考えています。

市民レポーターとは

市民レポーターは、地域の身近な生活情報やイベント、市民活動などをレポートし、発信していく役割を担うものですが、災害時には災害レポーターとして活躍することが期待されています。

NIED では、平常時から地域について調べ、その結果を共有しておくことで、災害に備え、また実際に災害が起きた場合に適切な対応がとれることから、こうした市民レポーターの活動も地域防災力の向上につながると考えています。

茨城県つくば市は、2009 年 3 月から市民レポーター養成講座がスタートし、その活動が先行している地域です。市民レポーターは、普段はつくばの自然や環境、グルメ、子育てなどの情報を同じく e コミの機能を活用した「e コミュニティつくば」で発信していますが、同年 10 月 8 日の台風 18 号のときには、生活道路の冠水や不通などの情報がレポートされ、身近な場所の被害状況を把握するために有意義な活動であることが、地域住民に理解されています。

また、つくば市では、保育園における災害時の子どもの引き取りなどの対応について知りたいという市民レポーターの提案から、現在市民レポーターによる取材や調査が行われています。市の計画上の取り扱い、福祉避難所や学童保育との関係、保育園周辺地域の大地震の際の被害想定など災害に関

する情報が収集されています。

この取材の前提として、保育園周辺の地域状況を把握するために、地域で発生する災害の特徴を共有し、対策を検討しました。その際、e コミのマップ機能を使って出力した地図を用いて、保育所や公共施設、道路などの位置を確認し、また、昔の地図と現在の地図を比較するなど、各地点の特徴やエピソードなどを交えながら、把握していきます。この結果、1970 年代、この地域には田畑が広がり、たくさん水路があったことが分かり、場所によっては地盤強度に懸念があることも共有されました。



***e コミュニティ・プラットフォーム 2.0**
地域社会を支える参加型のコミュニティ Web システム。ブログ、掲示板、マップ、カレンダー、RSS、SNS などさまざまな機能を搭載。オープンソフトウェアとして公開しており、無償で活用することができる。

<http://bosai-drip.jp/ecom-plat/>

北条における 市民レポーターの取り組み

北条ネット内にも、市民レポーターの記事を掲載するコーナーがあります。北条周辺の地域の身近な話題や役に立つ生活情報、市民やグループの活動などを市民の目線で取材し、パソコンやインターネット、携帯電話などを使用しながら、ブログなどを通じて情報発信していきます。

北条市民レポーターは、北条とその周辺地域に在住／在勤／通学している方々を対象としています。また、執筆された記事は北条ネットのみならず、広報誌『山なみ』にも掲載される可能性があり、多くの方々の参加と活躍が期待されています。なお、この活動は、今後設立が予定されている市民レポ

ーターのネットワーク組織「北条市民レポーター会議」によるボランティア活動となります。

また、市民レポーターのレポートに必要な知識や情報収集の方法を集積する場所、そしてその情報を発信・共有する物理的な場所として、「北条ネット」を活用していきます。

北条市民レポーター養成講座

市民レポーターになるには、養成講座への参加が必要です。養成講座は、北条地域からの情報発信や地域内の情報共有を目的に、市民レポーターの養成を目指すもので、2009年11月からスタートしています。2回参加すると北条市民レポーターとして認定され、記者証と腕章が発行されます。

養成講座は、北条コミュニティセンターで、すでに2回開催されました。第1回(11月7日)は、時事通信社防災 Web 編集長の中川和之さん、第2回(11月14日)は『上越タイムス』の月曜版を作成されている、NPO 法人くびき野 NPO サポートセンター理事長の秋山三枝子さんを講師としてお招きし、市民レポーターとして活躍するための視点、要件などをそれぞれの経験に基づいてお話しいただきました。中川さんには報道のプロの立場から、市民が地域情報を発信することの重要性と発信する情報(記事)を書く際の要件を、また秋山さんからは、新聞づくりの経験がなかった NPO が、その制作過程で培ってきたノウハウについて具体的にアドバイスいただきました。

さらに、12月2日には、ビデオカメラを使った映像編集講座を行いました。映像は、的確で説得力のある情報を提供することができるため、日頃のイベントの記録や災害時の被災状況などをよりリアルに伝えることが可能になります。取材映像は、北条ネットにアップすることが可能です。

なお、この特集号では、北条で行われた市民レポーター養成講座の具体的な成果として、市民レポーターとしての要件を満たした方々にも執筆していただきました。2回の講座の内容は、32～35ページにまとめています。



市民レポーター養成講座

北条の魅力を発掘するための地域間交流

北条コミュニティでは、地域間交流を新潟県の防災グリーンツーリズム宣言(2008年10月)の一環としてとらえ、平時の交流が発災時の相互支援につながると思っています。現在、茨城県つくば市北条(ほうじょう)地区や神奈川県藤沢市六会(むつあい)地区などの各地域や、つくば市の市民レポーター、NPO 法人藤沢市災害救援ボランティアネットワーク(FSV net)の方々との交流を行っています。

2009年12月5～6日、北条コミュニティのメンバーがつくば市を訪れ、つくば市民レポーター、つくば市北条(ほうじょう)地区商工会の方々との交流会を実施しました。つくば市は、国の研究機関が集まる地域として、日本の他都市の街並みとは異なる様相を呈しています。つくば市民レポーターのメンバーからはこれまでの活動を、つくば市郊外の筑波山の麓に位置する北条(ほうじょう)地区では、北条商工会の方々からまちづくりの取り組みを中心に、地域課題をどのように解決しているかを伺いました。

12月12～13日には、FSV netのメンバー5名が、北条コミュニティを訪問しました。初日は被災と復興状況の報告と交流会を4時

間にわたって行い、お互いの経験やノウハウを交換しました。2日目の午前中は柏崎市内の北条由来の茶室などを、午後は古刹を巡り、北条をより理解していただくためのプログラムが用意されました。

このような交流は、改めて北条について考える良いきっかけになりました。地元の魅力とは何かを真剣に考え、それを発掘することは、今後の北条にとって大切なことです。また、これらの地域とは、北条ネットを通して日頃の取り組みなどについて情報交換するといった交流も可能ですから、今後は地域で活動するNPOなどの団体との交流も行われる予定です。さらに、北条ではすでに手作り総菜事業所「ふるさと市場・暖暖」などの活動が誕生していますから、こうした既存の取り組みにも焦点を当てて、地域間交流を契機に、さらに地域防災力を向上させたいと思います。

これまでの活動と今後の展望

2009年の活動は上述のとおりですが、2010年1月には、藤沢市六会地区での交流が行われました。また、2月にはつくば市や藤沢市の方々が北条を訪れる計画もあります。さらには北条の子どもたちが、つくば市の先端科学について見学・体験したり、つくば市や藤沢市の子どもたちが北条でクワガタやカブトムシなどの昆虫採集を中心とした自然科学の体験をするなど、多くの方々が参加できるようなプログラムの企画も進められています。

こうした平常時のさまざまな取り組みが、地域の防災力を高め、「協働型防災社会＝リスクガバナンス」の確立につながることを期待しています。(三浦伸也)

<防災グリーンツーリズム宣言>

新潟県は、国内有数の食料生産基地となっています。加えて、美しい自然、豊かな食、伝統的に引き継がれているコミュニティでの人と人との絆などに恵まれています。日頃から都会の多くの方々と持続的にグリーンツーリズムを通じ、それぞれの地域住民が相互に様々な交流を進めるプラットフォームを築き上げ、全国の皆様に愛される「第2のふるさと」を目指してまいります。

そして、いざという時には、本県は、このプラットフォームを生かし、大災害に遭遇され困惑されておられる被災者の皆様に対して安全・安心を提供し、県内に100万人程度の受入れを目指す「防災グリーンツーリズム」を押し進めることを、ここに宣言します。

[<http://www.pref.niigata.lg.jp/seisaku/1225130471214.html> より]

地域防災力を高める市民活動の実践 ー北条を知る、北条を伝えるー

第1回市民レポーター養成講座 「伝えるってなんだ!？」

伊部秀男さん（北条コミュニティ推進協議会安全対策室委員）



北条コミュニティ安全対策室では、地域の情報発信および情報を共有するために北条ネットを開設し、地域の方々に北条を伝える市民レポーターとして活躍していただくため、養成講座を開催しました。第1回は、「時事通信社防災リスクマネジメントWeb」編集長の中川和之さんから、災害時の情報発信の重要性および情報の取材方法について学びました。受講者は地元の小学生7名、小学校の先生2名、地域の方々27名です。



中川さんを迎えて

中川和之さんは兵庫県芦屋市で育ち、日本大学芸術学部放送学科に入学された当時から3年半にわたり友人とバンド活動を行う傍ら、音楽事務所設立など行っておられたそうです。

同大学を卒業と同時に時事通信社に入社され、社会部に配属されたのち、警視庁、国税庁、気象庁等を担当されました。その後、気象庁を担当した翌年に地震学会会員となられ、1995年に阪神・淡路大地震が発生した際、取材応援チームとして神戸に13日間滞在され、3カ月後には編集を担当した『大地震を生き抜く』を発行されました。その後、神戸総局に転勤され、「日本災害情報学会」設立の呼び掛け人になられた後は、地震関係のさまざまな学会の委員に携わってこられました。2005年に時事通信社編集委員になられた後は、防災、減災政策のニュースや各種資料を有料で行政や企業に配信する「時事通信社防災リスクマネジメントWeb」の編集長とし

活躍されています。また、中越地震、能登半島地震、中越沖地震など、各被災地をつぶさに取材され、記事にされた実績をお持ちです。

以下に、中川さんの講座の内容をまとめました。

報道とは ニュースとは

報道とは「社会の出来事などを広くつげ知らせること」（広辞苑第3版）と言われています。社会の出来事とは「新しいこと、珍しいこと、知られていないこと」であり、そのために東西南北走り回って情報を集めます。その際、新潟県内なのか、柏崎市内なのか、あるいは北条地区内なのか、町内なのかという、誰に対して伝えるのかを考える必要があります。平時の情報はニュースとは受け止められにくいきらいがあります。

では、ニュース性とは何でしょうか。それは「珍しさ」「新鮮さ」「身近さ」で決まります。「犬が人を噛んでもニュースではないが、人が犬を噛んだらニュースである」と言われるたとえばありますが、珍しいことがニュースになります。また、新鮮さもニュース性を決める要素になります。どんな情報でも今日の出来事にはニュース性があり、1年前の出来事にニュース性があるとは思われません。身近さもニュース性にかかわってきます。

皆さんも同じ事件や災害であっても、より自分に近いところで起こる出来事には関心があるのではないのでしょうか。例えば、外国で事故があったとしても、身近な人がかかわっていないければあまり関心を持たないのに、市内や北条地域の中で何かが起これば、よりくわしく知りたいと思うでしょう。

市民レポーターとしての取材の要点

市民の力を育てるのが市民レポーターです。人間は、どんなメディアで伝えられても、伝えてもらうだけで嬉しいものです。また、社会に認められた気持ちになるも

のです。ですから身近な所から取材をすることが大切です。

何でもニュースか？

記事を書く際、相手に対して何の情報を届けるのか、自分が理解して自分の言葉で、相手に分かるように書いているかを確認します。ひとりよがりの一方的な意見ではないか、またたとえ事実であっても、断片だけではなく、事実が積み重なっているかどうかということも重要です。

メディアを使って伝えるには、 ニュースの手法を活用

取材の際は、どのの誰かを知ってもらうため、名刺、腕章を用意する必要があります。伝え方の上手さは関係ありません。記事の切り口、企画が勝負となります。皆で考えることで知恵が出ます。当たり前のように知られていない事柄なども、ほかの地域ではニュースにならないかもしれませんが、身近な地域であればニュースかも知れません。

見出しが勝負

記事は一度に分かる分量に限界があります。新聞記事は25行、テレビニュースは50秒といわれ、短い時間で伝わるように整理しないと相手に伝わりません。読んでもらうには見出しが勝負になります。何日もの取材でできあがる特集番組、何時間の取材が数十秒の映像になるのは当たり前です。

「10を調べて1を書く」「100を調べて1を書く」。記事を膨らませる作業よりも、取材した材料を削り込む作業が大事になってきます。ただ短くても「いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように」を押さえる必要があります。

ニュースのミソは誰が知っている？

資料よりも、資料を作った人がミソを知っています。資料になっていないところ、書かれていないところに発見があるかも知れませ

ん。もちろん、ポイントを聞き出すためには基礎知識も必要になります。相手の立場をよく理解して、当事者から、うまく話を聞き出す取材をしましょう。

協働作業で記事を仕立てる

記事はいろいろな側面から書く必要がありますから、取材についても手分けして行うこととなります。まず、アウトプットの形を考えて、そこに記事の種類、ネタの内容、担当者を割り振りながら、マンネリ、ワンパターンにならないようにするなど、さまざまな工夫が要ります。

文章力、表現力よりも先に身につけることがある

事前取材で何が気になったのか、何を聞いてみたいと思ったのか、実際に取材して、どこに感動したのか、どこになるほどと思ったのか、どこがめずらしいと思ったのか、そして取材結果から何を伝えたいと考えたのかを身につける必要があります。

最後に、災害時のボランティア活動は家屋の片付けだけではありません。地域への情報提供も立派なボランティア活動です。避難所や公共施設の掲示板に情報を張り紙で提供するのも市民レポーターの役割です。中越地震の際、川口町で広報誌を作成し配布したのは練馬区から来た博報堂の社員でした。このように災害時は身近な情報が不可欠です。

この市民レポーター養成講座で勉強された方々には、ぜひ地域の皆さんに身近な情報を提供していただきたいと思います。

参加者からの感想

中川さんは、会場の最前列に座った小学生たちにも分かるように話をされていたのが印象的でした。小学生にとっては初めてであろう名刺を渡して、自らの自己紹介するところから取材の信頼性の話をされ、自らの話を具体的に実践するにはどうしたらよいのかを分かりやすく説明される姿から、これまでの中川さんの地道な取り

組みを実感しました。

中川さんのような実践活動が、地域からの情報発信という種を蒔き、芽を育てることにつながると実感した講座でした。

市民メディア 取材シート	
取材チーム名	取材班 名前 名前
取材企画タイトル:	
発表媒体(メディア):	
取材企画案一言メモ(何を取材してくるか、きちんと調べる)	
どこで?	
だれに話を聞く?	
何を話しているところを?	
どんな話を聞くつもり?	
どこが面白い?	
想定質問(最低3つは事前に用意する)	
1:	取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
2:	取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
3:	取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
4:	取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
取材費・デスク情報	
連絡先	

中川さんが提案された「市民メディア取材シート」

第2回市民レポーター養成講座

「市民の目からみた地域コミュニティの取材と編集」

丸山由貴さん(北条コミュニティ振興協議会副主事)



第2回市民レポーター養成講座は、2009年11月14日(土)午後1時から行われ、小学生から70歳代の方まで総勢25名の方が参加しました。アットホームな雰囲気の中で、参加者の皆さんもとても楽しそうでした。

今回のテーマは、「市民の目からみた地域コミュニティの取材と編集」で、講師は新潟県の上越地域新聞『上越タイムス』の責任編集をされている、NPO法人くびき野NPOサポートセンター理事長の秋山三枝子さんです。同紙では、近年盛んになっているNPOの動きや地元の活動状況を分かりやすく紹介しています。

くびき野NPOサポートセンター設立の経緯

くびき野NPOサポートセンターは、当初青年会議所が中心となって設立されました。主な活動内容としては、NPOの法人化の相談や団体の運営に関する相談などが

あります(法人化のポイント・申請手続きなど団体組織のマネジメント・PR方法など)。このようなNPOのサポートセンターは県内に無いため、県内全域からさまざまな相談が寄せられるそうです。

市民目線の活動で、『上越タイムス』を救う

NPOのサポートを行ってきた組織が、なぜ新聞づくりをするようになったのでしょうか。もともと『上越タイムス』は、1980年に上越地域の地元紙「上越新聞」として創刊されました。地域の行政・経済関係記事を中心に、全国紙と同じスタイルでニュースを提供し、地域新聞としての役割を果たしていましたが、1990年に経営が悪化。地元紙の灯を消すまいと経営・組織の再編成が行われ、『上越タイムス』として再出発しました。1997年からは紙面をタブロイド版に変えカラー写真を入れてスタイルを刷新、「地域に根差し

た新聞」を目指しました。しかし、外枠を変えても長年積み上げたジャーナリストの意識変革はそうスムーズに進まず、地元で根差した新聞を模索しながらも業績低迷が続きました。

そんな『上越タイムス』が大きく変わったのは、2代目社長の後を引き継いだ現社長の大島誠氏が執行役員に就任した1999年から。大島氏は上越地域を中心に複数の企業経営を担う父親のもとで、経営手腕を磨いた若手企業家です。上越青年会議所のリーダーとして強い信念と先見性をもつ大島氏は、社内の意識改革に取り組むとともに、地域で暮らす人々や企業を真剣に応援する「地域の応援団」を社のモットーとし、新たな紙面づくりを遂行しました。読者が朝一番で手に取る新聞の一面トップは、爽やかな気分になれる内容の記事とカラー写真で飾る。スポーツ欄では、県代表になった地元出身選手や全国大会に選抜されたチ

ームを思い切りバックアップする。地域に役立つ、細やかで多様な情報を掲載して、全国紙や専門紙との差別化を図りました。



発行部数が飛躍的に伸びた『上越タイムス』

加えて始まった新企画が、NPO紹介のページです。世の中の新しい動きであるNPOを、地域の人々に解りやすく正しく伝えるため、新聞記者が客観的に整理した内容で紹介するのではなく、NPOに紙面を提供し、独自の視点で地域の動きや現場の活動を報告するという手法を取り入れました。掲載は毎週月曜日で、割り当てられた紙面は4ページ、そしてこの記事の制作編集をくびき野NPOサポートセンターが行っています。

ジャーナリストの目線ではなく、NPOが市民としての目線でとらえた刺激や感動・共感を伝えることで、地元住民の高い評価を得ており、現在の発行部数は低迷期の2倍の1万9600部まで増えたそうです。

読者をひき付ける 「取材・執筆・編集」

市民の目線で書かれた記事が、なぜそこまで読者をひき付けるのでしょうか。秋山さんは、市民が取材・執筆・編集するときに必要なこととして、①新聞業界の常識にとらわれない、②取材する側、される側双方の思いを伝える、③汗のにおいや現場の様子などが目に浮かぶように伝える、の項目を挙げられました。ジャーナリストが書いたきれいな文章で淡々と綴られている紙面よりも、人の温か

さや人間臭さが伝わる紙面の方が、読者の支持を得るのでしょう。

さらに、取材する時は時間をかける（2時間程度）、ただその場へ行って話を聞くだけでは本当にその人（取材相手）が伝えたいことを理解することはとても難しいので、あえて取材時間を長くとるのだとのこと。他にもボイスレコーダーなどでの録音はしないそうです。なぜなら、ボイスレコーダーで録音し再生した音声ではその場のリアルを書けないから、ということでした。相手の話を聞きながら、感じたことを素直に書くことが、読者のリアル感につながるのだと思います。

また、取材ではただ単に相手にインタビューをするだけでなく、相手と自分の相互の理解が必要であることもわかりました。こちらが理解したつもりでも、それが相手にとって本当に伝えたいことでなければ意味がない。相手が伝えたいことを理解した上で、自分の感じたことを書くことが大切だと話されました。秋山さん率いるくびき野NPOサポートセンターがこうした気持ちで記事を書いていることが、低迷していた『上越タイムス』の発行部数増大につながっていると感じました。

次に、記事を書く際に注意するポイントとして、①読み手に活動の背景が伝わる切り口（なぜこの人はこんなことをやっているのか）、②自分がその時感じたことに自信を持って書く、③能力以上の記事は書けない、④思い切りがポイント（推敲しすぎると焦げ付く）、⑤自画自賛・敬語は避ける、⑥読み手が読んだ時のリズム感に注意する、を挙げられました。

実際に自分で書いてみると、書き始めが一番つらく、自分の知識の無さにがっかりすることがあります。そんな時には、「思い切り」が必要になります。まずは書かなければ何も始まりません。たとえ下手でも、自分がその時に感じたことを素直に書くことがとても大切だということを実感しました。

最後に、書いた記事を編集する際のポイントとして、①写真・見出し（タイトル）にこだわる、②やわらかい（楽しい）記事と堅い（大切なテーマ）記事のバランスに注意する、と述べられました。

前半が終わって、参加者は本当

に自分たちが市民レポーターになれるのか少し不安気味で、実際自分たちで話を聞き、文章を書くというのは簡単な事ではない、というのが率直な感想でした。

「思いを引き出す」 ーインタビューゲーム

そんな不安な気持ちのまま、後半は「取材・執筆・編集」のポイントを押さえながらインタビューゲームを行いました。年齢、性別に関係なくペアをつくり、お互いにインタビューするゲームです。

3分間の自己紹介の後に、5分間で相手を取材します。その内容を「この人にトキメキ！○○さん」というタイトルで記事にして、発表しました。初対面の相手ではありませんが、3分間の自己紹介でお互いに打ち解けることができ、子どもから大人まで真剣に相手を取材していました。住まい、年齢、仕事や趣味などを聞く姿は、まるで本物の新聞記者のようでした。



思いを引き出すーインタビューゲーム

おもしろい記事もでき上がり、大いに盛り上がりました。気がつけば、ゲームをする前にあった不安な気持ちも無くなり、参加者は「これぐらいなら自分にもできるかも」と思えるようになっていました。まさに秋山さんの作戦勝ち、だったのではないのでしょうか。

秋山さんは講座の最後に、「文章を書く＝人を説得（納得）させる＝ラブレターです」と表現されました。記事を読む人に気持ちを伝えて説得（納得）させることはとても難しいことですが、ラブレターも同様に自分の気持ちを伝えて説得（納得）させるのは簡単なことではない。そんな秋山さんの言葉に参加者は全員納得！これから始動する市民レポーターから北条の皆さんへ、心温まる素敵なラブレターが届けばうれしいです。

「この人にトキメキ！品田さん」

(最高齢・五十嵐さんが、真珠院住職夫人の品田さんにインタビュー)
タイトル：「若かったらこんな女(ひと)と結婚したのに…」

お歳の割に若い気分たっぷりバイク乗りがお好きで、田子倉まで走っていくとはすばらしい。息子さんはサッカーに熱を入れていて、将来はサッカー選手になるのを願っているのではないかな。

今現在、コミュニティの専門室室長として多勢の室員をまとめるのが大変、でもその役をしている時に生きがいを感じるとのこと。なんとりっぱなこと。そんな品田さんのストレス解消法は息子とのケンカ、ケンカできることは幸せなこと。はねっ返りのお母さんと自分で言っているこの人に好感、若かったらプロポーズしていたのに…。

「この人にトキメキ！堀田さん」 (中学生の庭山さんが、町内会長の堀田さんにインタビュー)

タイトル：「人生で大変な事、今はまっている事」

今まで一番苦労したのは、東京で就職したので、家族と別れることがとても大変だったこと。

今まで一番嬉しかったのは、自分の子どもができたこと。今はまっているのは、去年の夏の甲子園で準優勝に輝いた日本文理の試合をビデオで1日1回みること。

<ペアを組んだ参加者の感想>

●近藤彩夏さん(小学校5年生)

北条コミュニティセンターで市民レポーターの講座があり、私はお友だちと先生と一緒に参加しました。講師の秋山さんから最初になぜ『上越タイムス』を発行することになったのか、新聞を作るときにどんな工夫をしているのか説明をしてもらいました、最初は少し難しくて分からないところがありましたが、話を聞いているうちにだんだん理解することができました。

●丸山智子さん(北条コミュニティ委員)

秋山さんのお話はとても親近感をもてる内容で、普段気づかないこと、気づきにくいことなど、とてもためになる話をうかがえて良かったです。インタビューゲームでは、決められた時間の中で取材し、記事を書き、編集するという作業はとても難しかったです。取材メモができてそれをうまく文章に起こすことができない、人に読んでもらえるような魅力的な文章が頭に浮かばないという事態で大変でしたが、普段話す機会の無い小学生の近藤さんといろいろな話ができてとても楽しく、久しぶりに若返った気分になりました。今後の課題は文章力の強化です。みんなに読んでもらえるような文章を書けるようになりたいですね。

第1回地域間交流

つくば市民レポーター、つくば市北条地区商工会青年部との交流

三浦伸也(NIED 研究員)

地域間交流の意図(防災グリーンツーリズム宣言と地域間交流)

新潟県では、新潟豪雨災害(2004年7月)以来、中越大地震(中越地震、同年10月)、豪雪や新潟大停電、そして中越沖地震(2007年7月)など度重なる被害に見舞われました。この災害からの復旧・復興に際して、全国からの支援や協力を受けたことを感謝し、2008年10月、「第2のふるさと・新潟」として首都直下型地震等、災害時には県内に100万人程度被災者の受け入れを目指す、防災グリーンツーリズム宣言を行いました。柏崎市北条地区が取り組んでいる地域間交流は、この趣旨を踏襲して行われているものです。

一方NIEDでは、都市被災者の受け入れのみならず、柏崎市のように3年間に2度の震災に遭遇するという経験を礎に、被災時の支

援を相互に行うことを目的とした地域間交流を提唱しています。地域の特性を勘案し、NPOや地域団体といった組織も含むネットワーク型の地域間交流を推進していることが特徴です。

地域間交流の概要

今回は2009年12月5日(土)～6日(日)の2日間、柏崎市北条地区コミュニティと、つくば市民レポーター、つくば市北条(ほうじょう)地区商工会の方々との交流会、視察が行われました。

北条コミュニティからは、コミュニティ振興協議会会長の江尻東磨さん、副会長の中川ナツ子さん、北条コミュニティセンター長の神林良定さん、主事の戸田洋子さん、安全対策室長の吉川公一さん、安全対策室員の品田純子さん、そして、柏崎市市民活動支援課主任の植木馨さんが参加しました。

交流をベースに、つくば市域内で北条コミュニティに共通する地域性をもつ場所をめぐり、今後の地域間交流のベースを作ることが目的としました。

訪問地の紹介と訪問地での議論、収穫

(1) つくば市内視察

つくばに到着後、豚しゃぶ・豚料理とワインのお店で昼食。長年の研究とつくばの自然が生んだ幻の豚「味麗豚(みらいとん)」のコクのある味わいが大変好評でした。続いて、つくば土産のひとつとして挙げられるフランス菓子工房を訪問しました。

その後、古民家「さくら民家園」を見学しました。母屋(横田家住宅)は1984(昭和59)年につくば市上大角豆(かみささぎ)の横田章氏より寄贈されたもので、江戸時代後期の建築と推定されてい

ます。風水害から身を守り日照や安定した飲料水を得るため、立地選定にも工夫がみられます。かつては屋敷林が連続し、豊かな緑が集落全体を包み込んでいたそうです。集落の行事は、夏の祇園祭・盆綱・天神社祭などの祭りを中心とした伝統行事と、水田の補修や農閑期に行う「芝焼き」「堀さらい」「空き缶拾い」などの共同維持管理業務の2種類だったとのこと。民家の展示は、北条コミュニティの防災グリーンツーリズムの参考になりそうです。

「さくら民家園」から、つくば市の学園都市のある中心部を通り、筑波山麓の地域に移動しました。このあたりの集落は立派な門構えの家が多いのですが、ブロック塀が意外と多く、災害時には危険ではないかと感じました。

(2) つくば市民レポーター 編集会議意見交換会

続いてNIEDのセミナー室において、つくば市民レポーターの方々と意見交換会を行いました。メンバーは、ホームステイの受け入れをしている方、防災士や元看護師、つくば市北条地区在住者や元在住者、FMつくば、防災ボランティアなどさまざま。



つくば市民レポーターの皆さんと

まず、北条地区コミュニティで展開している手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖」について質問があり、戸田さんからの説明に続いて、中川さんから「取り組みは順調にいったいるが、評判を聞いて問い合わせってくるメディアや視察への対応が大変だ」との補足がありました。

次に、防災ボランティアの方から、中越沖地震の際に茨城レスキューサポート・バイクが北条地区に支援に行ったことが語られ、既につくば市と北条地区との交流が

あったこともわかりました。

また、江尻さんは、つくば市民レポーターの具体的な活動について質問され、これに対し、日常生活における取材活動のほか、災害時に避難所としての役割が求められる市内の小学校とその校歌についてビデオ取材を行う、「つくば37スクール・コミュニティ・プロモーション～心のランドマーク」のプロジェクトと、これを地元のコミュニティFM「ラヂオつくば」で視聴できるように体系的に取り組んでいるとの回答がありました。また「ラヂオつくば」の増田和順社長から、「eコミュニティつくば」とコミュニティFMが連携することで、より効果的な情報発信ができるという説明がありました。

市民レポーターのテーマは、定期的に行われる編集会議で決められており、共同取材も行っているとのこと。レポートは、文字と写真による構成が中心で、特に写真の重要性が語られました。

最後に、「eコミュニティつくば」にアクセスカウンターがないことについて、アクセス数ではなく、地域にどう生かされているかで評価しているとの説明がありました。eコミ内でのやりとりがどんなに活発であっても、実際の行動に結びつかなければ、何のために作ったのか分からないということを改めて認識しました。

つくば市民レポーター

地域社会を支える参加型のコミュニティWebシステムで、NIEDの災害リスクガバナンス研究プロジェクトの実証実験の場でもある。「つくば市民レポーター編集会議」でもこのシステムを活用している。

<http://reporter.e298.jp/>

(3) 筑波山麓地区視察

2日目は筑波山を訪れ、筑波山神社でガマの油売りの口上を聞き、山頂へ。思ったよりも険しい道のりでしたが、山頂では遠くに富士山を望み、関東平野を一望する絶景が広がり、登山の苦労も吹き飛びました。また奈良時代の行政庁であった「平沢官衙」遺跡と、田井地区の再生された古民家も見学しました。

(4) 筑波市北条地区・神郡地区 コミュニティとの意見交換会

つくば市北条地区の市民研修セ

ンターにおいて、つくば市北条商工会青年部の方々と意見交換を行いました。

つくば市北条地区は、「平沢官衙」が置かれていたことでもわかるように古くから地域の拠点であり、江戸から明治・大正期には物流の中心として大きく栄えていました。しかし、土浦や下妻市など周辺都市の吸引力の高まりもあり、商店街は衰退し交通量も激減。さらに、1985年のつくば万博の開催に伴い、筑波研究学園都市の中心部への大型店の進出などのあおりを受け、空き店舗はさらに増えシャッター通りとなってしまいました。現在は北条商工会青年部が中心となり、地域振興事業に取り組んでいます。



つくば市北条地区商工会の皆さんと

2004年には北条郷ワーキンググループが立ち上がり、市の産業戦略ワーキンググループに参加するなど活動を強化。つくばエキスプレスの開業などで筑波山への観光客も増加するなど、活性化に向けた機運が高まっています。また県の助成制度を活用した「北条ふれあい館」など新たな交流拠点も整備されています。

参加者の感想

今回の参加者の感想をご紹介します。

(1) 北条コミュニティ参加者

■吉川公一さん

(コミュニティ振興協議会
安全対策室)

つくば市の景観は外国のようで、特に筑波山麓の住宅やその門構えの立派さに驚きました。古いものから新しいものまでがうまく融合した文化都市(研究所・学校・商業施設)で、文化的財産(学術・過去のデータ・最新機器)が多いと感じました。つくば市民レポー

ターとの交流では、活動状況・活動方法や取材の仕方など参考になりました。一方で、柏崎市北条地区は町内会単位、また21町内会全体としてもしっかり組織されていることを再認識しました。

■神林良定さん

(コミュニティセンター長)

印象に残ったのは「雪が降らないこと」です。北条では、冬の間は積雪のため交通や農作業等が不便で、また災害、火災、事故等の場合に救急車が運行不可能となることもあります。しかしその反面、雪合戦やスキーなど雪に関する遊びがあり、優美な冬景色があります。つくば市は東京に近いこともあって大消費地へ農産物を出荷しやすく、就職率は北条に比べて高いようですが、つくば市北条地区も柏崎市北条地区も過疎集落という点では同じだと感じました。感心したのは、若い人たちがボランティアで日本全国の災害現場へ救助作業に出かけていることです。北条にも来ていただいと聞いて、改めて感謝しています。

(2) つくば市サイドの参加者

■増田和順さん

(ラヂオつくば社長)

今回の交流会は、日本海側に位置する柏崎市と、太平洋側の関東平野のまっただ中に位置するつくば市とでは、まったく違った自然環境を有していることを改めて認識するところから始まりました。

互いの情報をまず交換し、共通点と相違点を認識することが交流の前提として必要だと感じました。

旧来型の濃い人間関係を基盤とし信頼で活動を進める柏崎市北条地区に対し、現代型の薄い人間関係を基盤にしつつも少数だが思いの強い人々が、さまざまな情報デバイスや手法を用いて活動を広げつつあるつくば市各地区という、コミュニティにおける防災・防犯活動の手法の違いも認識しあえたと思います。

■中村貴之さん

(つくば市民レポーター)

北条コミュニティの方々の説得力と行動力(エネルギー)を感じました。「暖暖」の取り組みについてはサービスの周知に苦労されている様子でしたが、地元のコミュニティFMを活用するといった意識は共通の理解だと思いました。いろいろな団体が相互に支援しあうことで、困難にも対応可能な土壌が生まれるのではないかと改めて感じました。

■市川洋子さん

(つくば市民レポーター)

「人々の生きる力」「地域で、人々が、コミュニティが、生き生きすること」が、ひいては緊急時の対応にも生かされ、また平常時の防災にもつながるということがよく分かりました。柏崎とつくばの若い世代、子どもたち同士の交流もぜひ実現させたいと思います。

■永倉喜代さん

(つくば市民レポーター)

常日頃からの近隣とのコミュニケーションの有無が、万が一の時の対応につながるという感じを強く持ちました。都会だけではなく、山間部においてもコミュニケーション不足が問われていたとは驚きでした。また、災害の経験を「どのように、わかりやすく」次世代につなげていくのかにも大変興味があります。

今回の訪問を振り返って

今回は、町内会やコミュニティではなく、市民レポーターや商工会の方々に参加いただいたこともあり、最初から応用問題に取り組んだために交流の意図が見えにくかったという反省があります。やはり初回は、地域同士の交流のほうがりやすかったのではないかと印象を持ちました。

また、実際に会って話し合い、共感し、また互いの違いを認識した上で交流する。こうした人と人とのつながりから、地域と地域がつながることを実感しました。そして、こうした交流を補完する役割として、ぜひeコミュニティなどのツールを積極的に活用していただきたいと思います。

地域間交流の前提として、お互いの信頼関係の醸成は極めて重要です。この信頼関係を築き上げることで、災害時の相互援助がより実効性を持ったものになると確信した地域間交流でした。



第2回地域間交流

NPO 法人 藤沢災害救援ボランティアネットワーク (FSV net) との交流

吉川公一さん(北条コミュニティ振興協議会安全対策室長)

2009年12月12日(土)～13日(日)の2日間、神奈川県藤沢市のNPO法人藤沢災害救援ボランティアネットワーク(FSV net)と、北条コミュニティメンバーとの交流会が行われました。

FSV netからは事務局長の水島三千夫さん、理事の老人劇団団長の水島孝さん、藤沢市議会議員の河野顕子さん、NPO法人くらし・環境・再生ネットワーク代表の堀千鶴さん、北条サイドは、北条コミュニティ振興協議会からは会長の江尻東磨さん、副会長の中川ナ

ツ子さん、北条コミュニティセンター長の神林良定さん、主事の戸田洋子さん、副主事の丸山由貴さん、安全対策室委員の伊部秀男さん、品田純子さんが出席し、NIEDの主任研究員の長坂俊成さんと研究員の三浦伸也さんも参加されました。

初日はまず、北条コミュニティが推進している手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖」で昼食をとりながら、お互いの活動について会話が弾みました。その後、北条コミュニティセンターの和室

に移動。自己紹介、プロジェクターを使用しての活動状況報告、意見交換など、夕方まで4時間近く行われました。それでも足りない分は夕食を兼ねての懇親会に引き継がれました。お互いに膝を割って本音の思いを語り合うことができ、これからの具体的な交流計画まで話題になるなど、夜が更けるまで語り合いました。

意見交換会ではまず、長坂さんから両地区の取り組みについて紹介、今後の交流に向けて期待したいとのあいさつがありました。次

に、江尻会長が北条地区のコミュニティについて説明しました。

北条地区コミュニティ振興協議会の活動

北条地区コミュニティ振興協議会は1976年設立し、現在の会員数は59名です。地区民および諸機関、団体、サークルで構成されており、北条公民館とともにまちづくりを進めてきました。「ふるさと愛」と「生涯学習」が原点になっています。コミュニティ、公民館、総代会の役割と連携のあり方、そして地域活性化に向けた地域課題をみんなの手で見直すために「ふるさと塾」を開設し、その結果、コミュニティ組織を改革することができました。

新しいコミュニティ委員に地域活動の基本的概念、知識、実践的手法を学び、活動してもらうために、コミュニティと公民館が共催して、「まちづくり講座」を実施。この学びを通して、コミュニティ委員の意識は「やらされている」から、「自分たちがやる」へと変化し、地域課題を見つめる目やコミュニティへの情報提供など、いろいろな面で大きく成長したと思います。例えば、地元にある八石山の荒廃を見かね、もっとふるさとの山を愛し、親しんでもらおうと、登山道整備や避難小屋、トイレ設置など、住民の自主的な活動によって山が見事に復活しました。これを機に「八石の自然を守り親しむ会」（会員180人）が発足。2005年度からは同会が主体となり、八石山の整備やさまざまなイベントの企画などの運営を行っています。

2000年にはコミュニティ創立25周年を記念して、地区内の偉人と伝説を織り交ぜた音楽劇を地区民の手で創作・上演しました。キャスト、大道具、小道具、メイク、音楽、運営資金に至るまで、住民一人ひとりが自分の力で参加し、それが大きな原動力になりました。当日は1700名のお客様が来場され、皆さんに大きな感激を与えるとともに、北条の大きな誇りと財産になりました。

また、超高齢化社会に対応し地域が地域を助け合うことを目指して、2001年度に「人材バンク設立講座」を開設し、設立の可能性を探りました。翌年4月1日に人材

バンク「北条地区助け合いセンター」を発足。地域単位での民間の人材バンクは全国初で、2007年度にはNPO法人として独立しました。

北条地区は中越地震と中越沖地震を連続して被災した地域ですが、自主防災組織や要援護者台帳整備、防災訓練や携帯無線の整備など、中越地震の教訓が生かされた地域として、地域コミュニティが防災に果たす役割が高く評価されています。

地域課題と地域防災を結び付ける防災コミュニティ活動の実践

振興協議会では、現在、「地域の課題を解決しながら防災活動へつなげる」を念頭に、地域課題と地域防災を結び付ける防災コミュニティ活動を推進しています。

協議会、町内会（自治会）を中心に、小・中学校、PTA、老人会、交通安全協会、消防団、警察などとも連携し、防災面では防災訓練、災害時要援護者対策、防災資機材の整備、主な危険箇所の洗い直し、また防犯面では、パトロール、小学校通学路の見守り活動、危険箇所の洗い直しなどを行っています。活動のステーションは北条コミュニティセンターです。

また、地域活動を担ってきた地域環境室、教育振興室、ふれあい推進室、住民起業室、人材バンク、やまなみ（広報）編集室の6専門室に加え、防災活動や地域の子どもは地域で守る推進運動（目印運動）等、防災・防犯の両面から安心・安全のまちづくりに取り組むために、新たに地区内の21町内会長等と連携した安全対策室を設置しました。

さらに、2009年9月4日には柏崎市立北条合同小学校と、初めて「学校－地域連携型防災訓練」を実施しました。平日の就学中に地震が発生したと想定し、児童の避難行動・安否確認、地域との情報連携、児童の保護者・地域への引き渡し訓練を実施。先生、児童、PTA関係者、町内会、市役所、協議会が参加しました。

手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖（だんだん）」

過疎化の進行により、地区内の商店が減少する中、中越地震がさらに拍車をかけ、商店はほとんど姿を消しました。困ったお年寄り

や車の運転ができない人たちから、「食材を買える店がなく、食事に困っている」「何とかしてほしい」という声が寄せられるようになったことを受け、その要請にこたえるため、被災した建物を借り受けて改装し、2006年5月に地元の食材を生かした安価な総菜店「暖暖」を開設しました。

特産品「つららなす」の市場開拓を目指して

「つららなす」は、20年ほど前から西長島地内で自家用に育てられており、もともとは「万寿満茄子（ますみなす）」という名前です。アクのない淡泊な味わいで、皮の緑色の鮮やさが特徴。昨年、料理研究家の目にとまって東京の有名料理店との取引が始まり、協力農家が無農薬有機栽培に取り組んでいます。「つららなすの会」では、さらに生産を盛んにして特産化し、地域活性化につなげ、協議会内の一組織として活動したいと考えています。

NPO法人藤沢災害救援ボランティアネットワーク（FSVnet）の取り組み

FSVnetは神奈川県藤沢市を拠点に活動しているNPO法人です。多彩な方々でネットワークを結成し、情報交換と交流で「顔の見える関係づくり」をモットーに2001年3月から準備検討委員会を設置し議論を重ね、2003年6月に設立。2006年10月にNPO法人の認可を受けました。藤沢地域だけでなく、他の地域のボランティアネットワークとも連携を図り、互いに助け合う市民社会の形成を目指し、災害時において効果的な活動ができるよう、①市民活動やボランティア活動を行う団体・個人のネットワーク化の推進、②災害時を想定したシミュレーション訓練、③災害時の活動・拠点および情報伝達手段の整備、体制づくり、④相互理解のための交流の場づくり、などの活動を行っています。

大規模な災害時は、被災者の自助・共助と防災関係機関の公助といった対応能力を上回る救援・支援が必要とされますが、これらを補い、多様なニーズに応じて行動できるボランティアが「手をつなぐこと」（ネットワーク）が重要になるとの信念に基づき、多彩な活動を展開されています。

意見交換会で発言されたさまざまなアイデア

それぞれの活動紹介が終わったところで意見交換が始まりました。FSV netからは、ぜひ「つらなす」を紹介したいとの要望がありました。またお互いの組織を活用できないか、まずは子どもたちの交流から地域の交流に拡大してはどうか、という意見もありました。藤沢市では、山の施設を松本市内に持っているとのこと。地区体育祭、6月に開催される「えんま市（300年の歴史を持ち、起源は馬市とされる。約600店に及ぶ露店が立ち並ぶ様子は圧巻）」も挙げられました。また、アウトドア体験は災害時に役立つことが多いので、江の島のジュニアヨットクラブとの交流も話題に上りました。さらには、地域おこしの一環として、地域の文化や歴史を題材にした市民演劇を仕掛けていってはどうか、といったアイデアも出ました。

柏崎市内見学

翌日は地域の魅力を感じていたために、柏崎市内のさまざまな施設を見学しました。

(1) 柏崎ふるさと人物館

柏崎の文化や産業を築き上げてきた先人の足跡をたどり、この地域の歴史を理解していただけたと思います。初めて訪れたという地元メンバーもいて、大変勉強になったと喜んでいました。FSVnetの皆さんは、藤沢市で講演をされたという比角コミュニティ松美町会長の関矢登さんと久しぶりの再会を果たし、話が尽きませんでした。

(2) 木村茶道美術館



一服後改めて茶碗を拝見

木村茶道美術館は、1984年に柏崎市北条地区在住の寒香庵木村重義により同市内の名園・松雲山荘内に設立された、茶道専門の美術

館です。2000万円もの値が付くという重要文化財クラスの茶碗（普段は展示室のガラスケースに収められています）で、抹茶を味わいました。美術館のある庭園は、紅葉の名所として有名な松雲山荘。赤坂山公園に隣接し、1971年12月飯塚謙三氏から市へ寄贈されました。静かなたたずまいの中で、しばし美の世界に浸りました。

(3) 番神地内の視察

FSV netの皆さんが中越沖地震の際ボランティアとして支援活動をしたという、番神地区を訪れました。復興がほぼ終わった日蓮上人ゆかりの寺院「番神堂」の境内からは、柏崎市街や柏崎港の風景を一望することができました。番神堂は、日蓮上人が1274年に佐渡から赦免されたおり、三十番神の霊を請い迎えて祀ったものと伝えられています。



FSVnetのメンバーが支援活動を行った番神地区

さらに、一遍上人の末寺で、毛利ゆかりの北条の名刹「専称寺」を見学しました。なんと、本山は藤沢市にあるとのこと、この縁が私たちの地域交流を結びつけたのかもしれない。

昼食は、「暖暖」特製のうどんとおにぎり、漬物、デザートとフルコースでした。残ったものはお土産にお持ち帰り。初めてという食材や料理もあって、食べ物談義に花が咲きました。

(4) 中村の大杉

白山神社の境内にあるこの大杉は、樹齢約1000年と推定されています。枝の下には乳房のような形をしたものがあり、ここから出るしずくを飲ませると乳児が丈夫になる、乳の出ない人が信心すると効果があるといわれ、乳神様として信仰を集めています。

また、長命杉ともいわれ長命に

あやかる参拝者も多く、また虫歯にも効くといわれています。



幹回り 10.8mの中村の大杉

(5) 真珠院と秀快上人

北条コミュニティ委員の品田純子さんのご主人が住職を務める真珠院には、即身仏として大変貴重な秀快上人のミイラが祀ってあります。秀快上人は真言宗豊山派の総本山長谷寺に入籍留学し、のちに大学僧に就任。1755年に帰郷して真珠院の第二十二世住職となりました。50歳にして入定を決意し、五穀を断って菜食で就業すること10年、1780年3月1日に同院裏山の石室に入り、21日に入定されたそうです。1991年には学術調査が行われ、即身仏が復元されました。学問僧の即身仏としてはわが国唯一のもので、市の文化財にも指定されています。

以上、北条での2日間の交流が無事終了し、次回は藤沢市での再会を約して解散となりました。

最後になりましたが、今回の交流についてFSV netの堀千鶴さんから感想をいただきましたので、ご紹介いたします。

「地域内にあるさまざまな課題を、地域の人々と共に積極的な解決策を探る仕組みにコミュニティの再生に向けた熱い思いを感じました。」

温かな心ときめ細やかな計画、市民と接する地域リーダーの役割。継続的に行うために、NPO活動組織を設立しコミュニティビジネスを展開するなど、自治する責任、小さな政府運営を目指していることが伝わってきました。

私たちが地域での活動を始めた大きな目標と同じでした。目指したものが間違っていなかった。同じ目標を持っている人々がいるということに感動するとともに、共育の良い機会になりました。」